

「垂加神道と国学」——先行研究と論点の所在——

近代国民国家の形成過程で、ナショナル・アイデンティティーはどのように形成されたのか。近年、この問いに関連して、文化的要素の役割に注目が集まっている。

近代日本について考えるとき、この点から想起されるのは「神道」である。近代日本の国民統合の過程では、その中核を担う天皇のプレゼンスを「神道」が支えていたが、それに先行する国民的意識の形成と「神道」の関係についていまだ十分な議論はなされていない。近代ナショナルリズムの起源は先行する諸「伝統」のどこに求めうるのか。このような問題意識に立つとき、垂加神道と国学は改めて重要な研究対象として浮上する。戦前期に日本の伝統的な国体観念を開示するものとして称揚されたこれらの思想潮流

遠藤 潤

は、ここにおいてナショナルリズムの文化的起源という視点からとらえ返される。今回のパネルの各報告は、こうした問題意識に関連しつつ、各自の現場で垂加神道と国学の関係を考察しているが、ここでは前提として先行学説にみられる垂加神道・国学関係論を整理しておきたい。

村岡典嗣 村岡は、垂加神道と国学の関係を最も早い時期に論じた一人である。村岡は垂加神道と本居宣長の関係を取り上げ、それを連続と断絶の二面性としてとらえた。すなわち、垂加神道の「神代伝説に対する儒教的合理化」と宣長の「儒教的解釈の排除」の間には本質的な否定関係があるとする一方で、「神道信仰の態度や情操」では連続性

がみられるという。この両面性は「ともにそれぞれ別なる見地に於いて成立する、別種の価値関係」で、両者は共存すると総括している。

小林健三 垂加神道や復古神道の研究で知られる小林健三は、徂徠学を交えて両者の関係を考える。すなわち、国学は「研究法」の点で徂徠学と共通しているが、「学の目標」では根本的に異なっている。国学の目標は「本質的価値」の発見にあり、これこそ垂加神道に触発されたものであるという。この価値は、小林によれば「国家的精神」や日本の「道」を意味しており、垂加神道における大義名分やヒモロギの思想は、これに密接に関わっているため、当然国学の対象となるものだった。小林においては、実体的な「国家的精神」が想定され、その解明という共通の問題意識ゆえ垂加神道と国学の間に影響関係が認定される。

安川實 安川は近世の和学・国学の研究で知られるが、彼の垂加神道・国学関係論では吉見幸和らの位置づけが重要な意味をもつ。幸和は垂加神道の強い影響下に学問を形成し、その考証性ゆえに垂加神道自体を否定するような方向性を示した。安川は、幸和らの考証的学問を垂加と国学の媒介項と考えることによって特色ある把握を見せている。

安川によれば、垂加神道は儒者の中華主義に対抗して「天皇に対する絶対的随順といふ国民的信仰」を主張したが、神学理論を朱子学によって再構成しようとしたため、儒家神道の極致の様相を呈した。垂加神道の本質はその「宗教的信仰」にあるが、その教説が伝承よりも古典に基礎をおく以上は新興の近世的学問によって厳密な批判を受け、その中から全く別個の「神学」として新生する宿命にあった。ただし、垂加神道に対する考証的批判は単なる否定ではない。それは「中華主義」を批判して学問として「日本道」を究明し、垂加神道の「日本主義の精神」を継承して「日本神学」を再建するものでもある。安川はこのように述べて、その流れを多田義俊、吉見幸和ら「神学者」と国学者に認める。安川にとって垂加神道は挫折ではなく、「自己解體をとげるべき歴史的宿命」にあったのであり、垂加神道は保井算哲の批判によって自己革新を遂げ、吉見幸和の徹底的批判によって「歴史的神学」として再生したとして理解されている。そして幸和らが果たせなかった、神典からの古神道の復活を達成したのが宣長や篤胤の「古学神道」となるわけである。

丸山眞男 垂加神道と国学の関係に関する丸山の把握について、ここでは限定的に一点のみをあげるにとどめたい。

丸山は、闇齋学派の特徴を閉鎖性と排他性に認める。その「自己完結」的性格は、近代日本の「闇齋シンパ」にも通じているのであり、「そこに流れる学祖もしくは教祖としての山崎闇齋の人格と思想に内在した「精神」が脈々として門人から門人へと継受され、一路発展して王政復古の一大大原動力となった、という想定」を「流出論的」説明として批判する。この「想定」は戦前の「国体論」イデオロギーとも緊密な関係にあり、このとらえ方からすれば、水戸学も平田学も結局垂加神道からの展開として位置づけられ、関係づけられているという。ここでは、諸思想のあいだに「連続性」を想定することのイデオロギー的性格が指摘されている。

阿部秋生 阿部は、垂加神道と国学の影響関係を明確に否定した点で際立っている。まず、垂加神道がある時期隆盛を迎えたことについては、垂加神道が「近世合理主義」の流れにあったからではなく、「その非合理性をそのままに合点すべきであるとする神秘性や不可測性」のため門流の数を加えたとして、垂加神道が考証学的な萌芽や契機を胚胎していたという理解を否定する。そして、垂加神道と国学の関係を考察する際には人的関係と思想的影響関係を厳密に区別し、国学者と垂加神道家の間の個人的人間関係や、

古典・古代に対する深い関心という共通性は認めつつも、思想的影響関係は否定する。そして、「儒家神道を批判することによって国学の方法が確立したというような、マイナスの脈絡」も認めない。

三木正太郎 戦後の神道学・神道史研究の立場からの論として、三木を取り上げる。

三木は死生観や国家観を対象として、垂加神道と国学の関係を論じる。死生観では、書紀にみえる日本の古代人の死生観が垂加神道の日之宮伝と篤胤の幽冥思想の両方に作用しているとして、そこに「一貫する生命の流れ」を認める。他方、国家観については、吉田神道で「最深の秘伝」とされ、垂加神道で最重視された「神籬磐境の伝」が国学・復古神道で批判されたことの意味を考える。この伝自体は、文献学的方法に立脚する国学によって排除されたが、他方で伝の「精神」は継承されたと述べ、「神の御国の国体を讃仰し、皇統を永遠に守護し奉るといふ垂加神道神籬の精神」は「宣長の直毘靈の精神」に相通じ、「皇統守護の志堅固不動なるべきを説く磐境の精神」は、篤胤によって強調されたと指摘する。三木の場合、いずれも共通するのは、神道の諸思想に「その内実の生命において伝承せられ、復活せられ、或いは貫流してゐる精神」が存在すると想定し

ている点である。

以上、垂加神道・国学関係論について、いくつかの先行研究をとりあげて紹介した。近年のナシヨナリズム研究の視点から再評価される「垂加神道と国学」という問題領域だが、他方、学問的視座の点で「国体論」といかに異質たりうるのだろうか。この課題に関連して、先行研究から浮かび上がった論点を整理しておきたい。

第一には、垂加神道から国学へ継続的・連続的に映じる諸現象をどう捉えていくか、という根本的な問いがある。一つの答えとして、両者が共有したテーマやトピックへの注目があり、尊皇思想や天皇、靈魂観（日之少宮・幽冥観）、神籬磐境の伝が想定される。こうした問題設定に際して、私たちは不変的、本質的な「日本精神」やそれに類する観念・思想の実体化をいかに回避しうるのだろうか。

前田報告は、思想的テーマとして「現人神」を設定し、近世日本における天皇權威の浮上と垂加神道、国学の関係を論じている。天皇權威の浮上は知識人におけるナシヨナリズムの形成プロセスとしてとらえられている。垂加神道が「日本人」の死後安心論を提起し、それを支えるのが天皇であるとしたときに「現人神」の論理が浮上し、本居宣長がテーマとしての「現人神」を継承した。ここには従来

とは異なる連続性把握の可能性が考えられる。

他方で、両者の断絶面も今後の課題である。単純化をおそれずいえば、不変なる思想・観念の存在を前提にして垂加神道と国学の連続性を語る者と、実証的にその断絶性を語る者のあいだの「対話」は対話として成立していない。語る水準や位相の違いを意識しつつ、それらを単なる併存に終わらせるのではなく、相互に関わらせる構造を考える必要がある。

これに関する第二の提起は、垂加神道や国学は近世社会においていかなる〈場〉に流通したかという問題設定である。垂加神道や国学の〈場〉としては、朝廷、社家、藩・武家、庶民などを想定できる。西岡報告は、出雲大社において垂加神道が社家の学問として機能していた姿を提示する。それは祭式や宗教的儀礼のための学問として存在し、出雲大社に国学が導入されたのちも、垂加神道は儀礼の学問として依然一定の影響力を保持し続けた。社家にとつて学問が儀礼の場面で重要な役割を果たしていたことは、今後、垂加神道の性格を考えるうえで示唆的である。また、垂加神道と国学の関係についても〈場〉に即してとらえることで、単なる移行や対立ではない、新たな理解が期待できる。

こうした〈場〉は静態的ではなく、テキストの生産や普

及のプロセスによって形成されていく。このような理解に立つのが小林報告である。小林は垂加神道や国学の言説の生産を〈知〉のネットワークの形成や文化的ヘゲモニーの掌握と関係づけて論じる。小林は、これらネットワークやヘゲモニーを完結した思想が運ばれる回路という構図では把握せず、言説もまたネットワークやヘゲモニーの形成から作用を受けて再構成されると理解する。これは、これらの神道言説の〈場〉のダイナミズムを把握する上で有効な視点である。

参考文献

- 磯前順一・小倉慈司 一九六六 「正親町家旧蔵書」鳥蘭進・磯前順一編 『東京帝国大学神道研究室旧蔵書 目録および解説』東京堂
- 岸野俊彦 一九九八 『幕藩制社会における国学』校倉書房
- 小林健三 一九四二 「垂加神道の復古神道に及ぼしたる影響」『垂加神道』理想社
- 丸山眞男 一九八〇 「闇斎学と闇斎学派」『日本思想大系 山崎闇斎学派』岩波書店
- 三木正太郎 一九六九 『平田篤胤の研究』神道史学会
- 三木正太郎 一九八九 「垂加神道と復古神道の関係―先学説の回顧―」『日本思想史の諸問題』皇学館大学出版部
- 安川實 一九六一 「古学神道成立の由来」『神道学』三二

(日本学術振興会特別研究員)